

- ・本、著作物の複製物は、著作権法第67条第1項の裁定に係る複製物であります。
- ・裁定のあった年月日：2018年9月26日

の 實
覇 業
王 界

稲畑勝太郎翁少年時代

生きたる教訓、得難き修身書

薦 推 臣 大 部 文

トツレフンバ座講志立女少年少



君
塚
勝
彦
著

別 名

『大鵬の巢に

ある 頃』

人を便覧と欲する者
先づ人を使ふも、ことを
學べ

執筆

大鵬の巢にある頃中巻刊行に際して

昭和三年十月本會創立の精神に則り各偉人の少年時代の努力奮闘史を『少年少女立志講座パンフレット』としてみな様の座右に寄せ、さらにはそれをまとめて十偉人を一卷とし『大鵬の巢にある頃』―【上巻】―と題し、刊行して萬天下より燃ゆる賛辭をよせられてゐる本會は、更にそれが中巻を刊行する前提としてこゝに更に十大偉人少年時代の努力奮闘史をパンフレットとしてみな様の座右におくります。今回の十大偉人は、左の方々であります。御期待下さい。

理事會の再考により前回發表の分に訂正を加へました。

第一	武 藤 山	治翁	第六	梶 原 仲	治翁
第二	木 村 久壽彌	太翁	第七	稻 畑 勝 太	郎翁
第三	内 藤 久	寛翁	第八	馬 越 恭	平翁
第四	團 琢	磨翁	第九	森 永 太 一	郎翁
第五	小 林 一	三翁	第十	山 本 條 太	郎翁



翁 郎 太 勝 畑 稻 の 近 最

は し が き

著 者 識

一

如何なる方面ほうめんにおいても、先驅者せんくしゃはもつとも苦しい道みちを辿たどらなければなりません。新らしい道あたを開ひらき、新天地をきりひらくことは、大きな勞苦らうくと犠牲ぎせいとによつてのみかち得えられる賜たまひめであります。

それだけに先驅者せんくしゃの歩あるいた道は、開拓者かいたくしゃの開いた新境地しんけいちは、世にも尊たふとい勞作らうさくの結晶けつせうに外ほかならないのです。

わが實業界じつげうかいの霸王はわう、稻畑勝太郎先生いなはたかつたろうせんせいの如き、この先驅者せんくしゃの苦難くなんをなめられた、うとい、犠牲者ぎせいしやの一人ひとりであります。

二

立志偉人として謳はるゝ人々の歩いた路は、生ひしげつたい、ばらの道であります。健氣な決心の下に雄々しく起つた少青年の進まうとする道を、苦しめ、さいなめすのが世の中であります。それに根強く反抗し、征服して力強く自己を生かして行つた人こそ、私達が生きたる教訓として、得難き修身として仰ぐべき偉人であります。

わが實業界の霸王稲畑勝太郎先生の如き、その強き反抗者、雄々しき征服者であります。

三

孝心なくして幸福は得られません。努力なくして何の成功がありません。大廈の成るのは決して一日の故ではありません。稲畑先生の今日あるのも決して一朝一夕の故ではありません。そこには血と汗と、涙とに綴られた努力

奮闘史が織り込まれてゐるのです。先生は幼ない時から如何なる逆境に立つとも少しも屈せず、日夜たゆまぬ努力をつゞけられたのです。

四

努力は如何なる難所を征服する唯一の武器であります。孝心は幸福への唯一の曙光であります。身を粉碎しての努力と、涙ぐましくも美しい孝心とはかくして最後の榮冠への尊い礎となるのです。

稻畑先生の行く手は先生が七十歳になられる今日まで、一日として平坦な道ではありませんでした。山のやうな波瀾が幾十回となく起伏し、或は先生を倒さんとし、或はその前途を塞がんとしました。しかし先生は敢然としてそれを征服してつひに今日の如く有名な偉人となられたのです。

五

進む者に悲観は禁物です。先生の如く絶えず身に降りかゝる數奇な運命にもてあそばされ乍らも、只彼岸の光明へと、一路邁進されてこそ榮冠はその頭に高く輝くのです。

どうかみな様は今著書が描き出さんとするこの涙ぐましい先生の孝心と屈してもやまぬ努力奮闘の精神を魂深く刻み込んで下さい。

六

云ふ迄もなく先生は、實業界に稀に見る人格者であります。そして部下を愛すること我が子の如くであります。徳の偉人として愛の偉人として、正しき偉人として世の凡ねき青年子女の崇拜と尊敬を受けてゐます。

みな様はこの尊い先生の努力奮闘史を塾讀されて、第二の稻畑先生、更に第三の稻畑先生になられて下さい。著者はそれを希ひつゝ筆を運びませう。

文久二年の十月、京都をめぐらす嵐山の紅葉が、その錦を競ふ頃、わが實業界の覇王稲畑勝太郎先生は、菓子くわしの製造業せいざうげうを営む龜屋正重きまさしげといふ豪商かうせうを父として、京都の中央なかでお生れになりました。

家は商人でしたが、父君の人望と、四隣に名だたる豪商と御用商人といふ名聲めいせいの爲めに苗氏めうじ名稱なりのりも許されてゐました。

その豪商龜屋に、後にも先にもたつた一粒種つぶだねの男子として生れた先生は、世にも恵まれた若様わかさまでした。いつくしみの父母を初め、多くの召使達に取かこまれて、暑さ寒さあつさむも知らぬ幸福な少年でした。

しかし、幸福の神様は何時迄も同じ所に足をとめてはをりません。よく『昨日の大臣、今日の乞食』といひますが、先生もその言葉通りの運命を辿らなければならなくなりました。昨日迄の榮華えいげわも今は淡い夢と化し、得意の絶頂から失意のどん底に叩

き落されてしまつたのでした。

それは元治元年子の年の大騒動で、會津藩士が京都を焼打ちした時、先生の家もその災難に遭ひ、さしもに高層を誇つた先生の家は、二棟の大きな倉諸共、一物も残さず灰になつてしまひました。それで父母は當時三歳の先生を抱いて着のみ着のまゝで命からくゝやつと郊外に逃れました。

この大きな炎厄を境に、龜屋は一朝にして住む家もない、惨めな境遇になつてしまひました。

多くの雇人達も一人減り二人減り、あとに残つたのはその日の食にさへ事缺ぐ親子三人の惨めな姿のみでした。父君は、性來正直一途で少しも曲つたことをせず、しかも武士道で終始し、商人には必要な懸引も策も知らず、只正しきをもつて本分とする方でしたので、一朝こうした不遇に叩き落されると、決して他にすがり求める女々しい心を出しませんでしたので、無一文、着のみ着のまゝをそのまゝに、京都三條大橋

の東詰に小やかな家をかりて、そこで以前のやうに菓子かしの製造を始めたが、舊もととは打うつてかはつたみすばらしい營業せうはいだけに、今迄の御用商人の名聲はどこへやら、顧客こくといふ顧客はみんな他所よその店にとられてしまつて、誰一人注文うちんしてくれるものもありませんでした。

そこで一家は仕方なく、製造した菓子かしの風呂敷包せなみを脊負せなつて、町から町へ、村から村へと行商あきなひに出かけなければなりませんでした。

先生せんせいも八九歳の頃から重い包みを脊負せなつて町から町と行商あきなひに出かけました。

『菓子かしの御用ごようはございませんか、菓子かしの御用ごようはございませんか。』

可憐かれんな聲が、朝霧あさぎりをついて聞へる初秋の或日もありました。身を切るやうな寒空さむざらに響ひびき渡る冬の或日もありました。

冬ふゆの日、耳みみをもつんざく寒天さけぞらに、足袋もなく股引もひきもなく、剩あまつさへ身につけるは破れ果てた寒布子かんねのこ一枚――身を切るやうな寒さと戦ひつゝ、霜柱しもばしらをざく／＼と踏ふみつけ乍ら

『菓子や、お菓子!!』

と呼び歩きました。朝早くから夜おそくまで……。そして幼なき先生に與へられる食事はといふと、出先き出さきで一杯五文のウドンかけ只一つでした。

普通の人でしたら、豪家に育つたあまえた性質をそのまゝに、親達がいくら困つても、難儀をしても、犬ころを追ひ廻して遊びふけるのですが、根が孝心に厚い勝太郎少年はこうした終日のつらい仕事も一に父母の爲、家の爲め、引いては自分の爲めと思つて、一度だつていやな顔をしたり、悲しい心を起したりするやうなことはありませんでした。

風のひどい日や、雨の日や雪の朝などは、

『けふはお母さん一人で出かけるから、お前は家に居て勉強しなさい。もし風邪でも引くと大變だから……』

とお母様にさとされても、

『なあにお母様大丈夫ですよ。昔から子供は風の子といひます。これしきの寒さでこれしきの雨にちのくやうでどうします。私は男子です、こんな位なことに挫けやしません。それよりもお母様の方が大事な御體ですから』

と、云ひ放つて雄々しく家を出るのでした。でもその勇氣は、如何に不屈な精神のほどばしりであつても、まだいたいけな少年です。重い荷物と一緒に雪の中に吹き倒されたり、小さい手にやつとさゝえた笠を吹き破られることなどがあると、子供心にも急に悲しくなつて

『お母様!!』

と、叫んでさめぐと泣くのでした。然し少年は男子でした。負け嫌ひでした。やをら立ち上る、と

『何んだ。これしきのことに泣くやうでどうする。僕は男ぢやないか、男だなら、男だなら泣くな、まだこの先、僕の一生の中には、この百倍も千倍もの苦しみ悲しみが

襲つてくるのだ――。』

と自分自身を鞭打つてはげしました。

二

かうした辛い苦しい一日を終へて家にかへると、お父様に教へられて一心に勉強するのです。どんな寒い日でも火鉢一つなく、破れ障子の隙間から針のやうに入つてくる寒風の中に端然として

身體髪膚此れを父母にうけ……。

と、可憐な聲で孝經を讀みました。しかし夕食から九時頃迄と與へられた勉強の間ではとうてい勝太郎少年には満足と與へませんでした。それで少年はいつも夜の十二時一時迄も勉強しました。それなのに朝は二番どりが鳴くといつても機械のやうにはね起きて父母の手傳ひをしました。

まだ夜の明けぬ中から雨戸をくり、家の中を立派に掃除をしてそれからお母様の爲

めに水もくみました。薪も割りました。お米の臼のバツタも踏みました。そして一家の健康な朝食がすむと甲斐々々しく身をかため行商に出かけるのでした。

かうした孝子をして神様はどうして何時迄も苦しめて置きませう。一年二年と經つ中に何所の町でも。何所の村でも『孝子よ、健氣な少年よ』とめてはやされるやうになり、さては以前は大家の若様であつたと、その家庭にまで話の綾がもつれると、我が子の龜鑑として、衆目の許した孝子となつてしまひました。

かうしたことが原因の緒となつて、一家の努力は赤貧の峠をこへて月々にはいくらかの貯蓄も出来るやうになり、日を追ふて、その業は堅實を加へて行きました。

そして雇人も一人入れ得る迄になりました。一度龜屋を見放した幸福の神様はこゝに再び訪れ初めたのです。恰度その年でした。明治四年京都に初めて小學校が出来ましたので、形ばかりではあるが少々餘裕の出来た父母は、その孝心を愛でる餘り、小學校に入學させました。

勝太郎少年の喜びはどんなだつたでせう。京都に初めて出来た小學校にイの一番に籍を置くことの出来る身をどんなに感激したでせう。少年は學校に入ると一生懸命、魂を打ち込んで勉強しました。その努力と負け嫌ひとは常に級友にぬきん出てるました。

また勝太郎少年は他の學友達とはその勉強の仕方も異つてゐました。他の子供のやうに只本を讀んだり字を書いたりするのみではありません。讀んだ本の中から書いた字の中から『忠孝』の二字を拾ひ出しては、それを魂深く刻み込んでゐました。

學校からかへると、父母の爲以前のやうに夕食までは水をくんたり、お米をといだり、芋をおこしたりして手傳ひました。そして夕食後は父母の夜業の傍らで勉強をいろいろ有益なお話を聞きました。

その中には楠公の忠誠もありました。養老の瀧の話もありました。赤穂の忠臣義士の話もありました。少年はそのお話を聞く度に義に勇み、忠に燃えてゐました。父君

の後ろに廻つて肩を叩き乍ら

『お父様、僕も大きくなつたらきつと偉い人になつて

天子様に忠義をつくしますよ。』

と健氣な決心を物語つた夕べもありました。

三

忠孝に燃えつゝ勝太郎少年は勉強してゐる中に明治大帝にはしばしば幸臨あらせられましたが、その都度少年は作文や漢文の御前講演をして大帝から御賞めを受けコンパスなどのごほうびを澤山頂きました。かうしたことのある度に少年の感激は一直線に勉學に進みました。そしてやがて花の四月、小學校の課程を終へました少年は卒業證書を高く差し上げて家にかへつて來ました。

『お父様、お母様、有難うございました。今日無事に卒業が出來ました。そして席順は一番でした。』

と感激のあまり小さい雨の眼に涙を一ばいためてお禮をいひました。

思へば長い年月の間、父母が身を紛にして上げてくれた學校でした。お祭だからといつて、お正月だからといつて、お盆だからといつて、一日としてたゆまざうまぬ一家の努力の賜物でありました。そして少年自身も、楽しい蟬取りの群にも加はらず、螢取りの愉快さも知らず、タコ糸を引いたこともなく、コマに鞭をあてたこともなく、只孝心一途の勉強の賜物でした。

『勿體ない。この卒業證書には一家の血と汗にかたまつた強い真心がこもつてゐる。眞剣な血がみなぎつてゐる。涙があふれてゐる。粗末にしてはならない。』

かう思ふと、勝太郎少年はクル／＼巻きにしてあつた證書をひろげて神棚に上げ、今までの幸福と健康を謝し、尙今後の加護を小さい手に心からなる柏手を打つて祈りをさへげました。

かうして感激の中に、努力の孝子にはまたも幸福のきづなは糸を引いて訪れて來ま

した。

それは勝太郎少年が十四歳の年でした。京都市に初めて府立の師範學校が出来ました。そして各小學校の俊才のみを選んで入學を許しました。その俊才中から更に甲生乙生丙生と分けて受験させられましたが、人一倍勉強家の勝太郎少年は、第一の成績で甲生に入學し、父母の許を遊れて師範學校の寄宿舎に入ることになりました。

こゝでも少年は他の學生の二倍三倍の勉強をしました。家にある父母や妹達の身の上を思ひ乍ら、終日心に寸時の油斷もありませんでした。

『お父様のお店は繁昌してゐるか知ら、お母様のお體は御大丈夫か知ら、妹も私にかはつて孝行をつくしてくれてゐるか知ら……とそれからそれと、慈愛の父母の許にやさしい心を走らせては、自分がかうして勉強することの出来る孝福を感謝しました。感謝の念が募れば募るほど、少年の心は本にすいつけられて行きます。學友達は晝間のつかれかすやゝと眼つて故郷への暖かい夢路を辿つてゐる時、少年はそつと起き

ては、行燈あんどんに着物きものをかけてあかりが外そとにもれないやうにして勉強べんけんしました。一頁ぺいじ讀んでは息いきをころし、次の頁つぎをめくりました。

かうして勉強べんけんをしてゐる中に、勝太郎少年の身うへの上に大きな事件じけんが起おこりました。それはやがて學期試験がくしけんが初はじまるといふ十二月の初めでした。

針はりをふくんだ氷のやうな比叡風ひえいふうがヒュウ／＼と物ものすごく音おとを立てゝ、硝子窓がらすまどを打つ深夜でした。見廻りの舍監は提灯片手に各部屋を見廻つて、やがて最後の部屋を出やうとして何心なにこころなく押入おし入れに眼めをうつした時

『おやッ！』

と立ち止まりました。消燈後せうとうご、火氣一切きんを禁きんじてある寄宿舎に、殊ことに押入れなかの中に火の氣けがちらりと舍監しゃかんの目に入はいつたのです。舍監は不審ふしんに思つて、

『誰だッ！』

と誰何すいかしました。その鋭い聲こゑは深夜の中に響ひびき渡りました。

『押入に居るのは誰だッ、出る!!』

といふや、いきなり襖を強く開きました。その時

『先生ッ——』

と、舎監の前に兩手をつき兩眼に涙を一ばいためた一少年がありました。

『先生、申譯ございません。』

少年は尙も一心におわびをしました。それは可憐な姿の勝太郎少年でした。

『何をしてゐたんだ。稲畑君、消燈後ですぞ。君は舍則を破つて押入の中で、一體何

をしてゐたのだ』

と鋭く疊みかけられました。

『ハイ、「世界國ヅクシ」(福澤先生の著者)を寫してをりました。』

『教科書を寫してゐた?』

『ハイ。』

『君には教科書はないのか、教科書代として毎月五十錢宛府から與へられてゐるのにその金を君はどうしたんだ。買ひ喰ひでもしたのかッ』

舎監は尙もはげしく詰問するのでした。

『先生、すみません。どうぞお許し下さい。私の家は貧乏です。私はやつと小學校を出ました。その間、お母様は僅か一錢の髪も結はないで、私を學校にやつてくれました。それなのに、私は小學校を出ても家の手傳いをせず、かうして更に上の學校にやつて貰つてゐます。せめて日曜だけでも家にかへつて、手助けがしたいと思ひますが、勉強に追はれてそれも叶ひません。それで私の働いた分として、毎月いたゞく五十錢を、お母様に送つて家計の足しにしてゐます。』

『さうかよく分つた。先生はとがめはせぬ。もう泣くな、お前が泣くと先生も泣きたくなる。孝行をつくせ、教科書は私のを貸してやる。』

と先生も涙聲になつて、少年の肩に手を置き、

『只舍則を破らぬやうに心掛けてくれ。』

と云ひ残して自分の室にかへられやうとしましたが、またあとがへつて

『稻畑君もう一言君に云ふことを忘れた。君は決してかうして高イビキをかいてねて

ゐる學友達、富貴と幸福を羨やんではいけないよ。いや少しも羨やむことはない。

貧乏は無上の財産である。それは君が今の決心を、何所までも押し通して行つた數十

年後に於て初めて分ることだらうからね。』

と、老の眼に涙一ぱいためて、恰も我が子にさとすやうにいはれた舎監は、少年の

顔をジーツと見つめてゐましたが、

『もう一時半だ、ねたまへ體に毒だよ』

と云ひ残てお室にかへられました。

四

かうした苦難をなめつゝ専念學業にいそしんでゐる中に、孝子には更に三度目の幸

福が訪れて來ました。それは、勝太郎少年に佛國へ留學を命ずる話が持ち上つたのです。

時は明治十年でした。畏くも明治大帝が御遷都遊ばされた砌り、京都府に御下賜された産業研究の獎學資金で、從來京都の工藝品である織物、染物、陶器、美術工藝の類に、外國の工業法を加へて立派なものにしようとするこゝになり、こゝに京都府下の優秀な學生八名を選んで留學させることになりました。その中には努力勉學の上に於ては、決して人後に落ちない勝太郎少年が加へられたことは云ふ迄もありません。

その時勝太郎少年に第一に留學のことをつけて決心を促したのは舍監でした。舍監は勝太郎少年に對してその責任の重大なることもつけ加へられました。

少年の喜びは大變なものでした。何百人何千人もの學生の中から選ばれた八名の中に、自分が入つたのかと思ふと、師範學校に入學した時の幸福と思ひくらべて、餘り

にも恵まれた己が境遇が、恐ろしくなるやうな氣もしました。

思へばそれは本當に次から次と、矢つぎ早やに恵まれた幸運でした。身はたとへ豪家の息として生れたものゝ、その後の苦難は、たうてい文字にも言葉にもいひつくせぬ餘りにも惨めな生活でした。勝太郎少年はその夜寄宿舎の一室にとちこもつて、それからそれへと思ひを巡らせました。

『あの時、父母が本當に心から自分のことを思つてくれなかつたら、今時分は矢張り以前のやうに菓子この小賣小僧として、雪の中、風の中に働いてゐなければならぬかも知れぬ。でもこのまゝなつかしい父母や妹と別れて、住みなれた京都の街をすてゝ遠く海外に留學することは、光榮には違ひはないが、行く人も残る人も本當に淋しいものであらう………』

かう考へて來ると、父母の貧にやつれた姿が目に浮んで、さてはさめくと泣きくづれてしまひました。その時勝太郎少年は『孝行』について二通りの行ひを考へてゐ

ました。それは、家にあつて父母と一緒に働き、家計を助けてたとへ家は貧になつてゐても、親子兄弟仲むつまじくその日その日を送ること、と、もう一つは一生懸命に努力して、父母や家の名をあげることに、この二通りでした。

勝太郎少年は其夜一睡もしないで考へめぐらした末、第二の方法をとりました。

『さうだ、僕は偉い人になつて父母の名をあげやう。それが今自分の進むべき唯一の孝道である。』

さう決心がつくと、いよく留學の決意をかたくしました。そして翌る晩父母に報告すべく家にかへりました。でも家につくと今迄かたく握りしめてゐた決心がまたにぶりました。

家には小さい形ばかりのアンドンを一つつけて、父母はその薄明りの中に夜業をしてゐました。小さい妹は父母のかたはらに眠い目をこすり乍ら、あどけない歌をうたつてゐました。

それを見ると少年は、若し自分が遠く海外に出て行つた後のことを考へて、さぞ両親が、力を落すだらうことを想ひ浮べると、父母に喜んで貰をうと思つてかへつて來た愉快な心が急に暗くなつて、何だか悲しい訴をもつてかへつてゐるやうに思へてなりませんでした。

『このまゝ何にもいはないで學校にかへらうか。』

といふ悲しい氣持ちにもなりました。

でも勝太郎少年は先生からいはれた報告をしなければならぬ。父母の賛、不賛も聞がなければならぬと、勇氣を出して家に入つて行きました。そしていきなり

『お父様、私に洋行しろといはれますが………』

これだけ云つて父母の顔を見守つたのです。

『洋行！ 誰が洋行させてくれるのか？』

父母はあまりのだしぬけにびつくりして問ひかへしました。

『ハイ 天皇陛下の厚い御思召しで、京都府から洋行を命ぜられたのです。』

『エッ』

父母はいひ合せたやうにびつくりして言葉もありませんでした。少年は今迄のこ
とをくはしく話しました。お父様はその一仕始終を聞き終つてから、やをら膝を進め
て

『さうか、それは何といふ嬉しいことだらう。行け、行つて来い。家のことは少しも
心配はない。フランスに行つて

天皇陛下の御鴻恩に報ひるやう努力しておいで……』

と即座に賛成してくれましたが、お母様は嬉しさと淋しさと心配さとの涙が交錯して
只泣くばかりでした。

少年も泣きました。妹も泣きました。一家手を取り合つて泣きました。

泣くな、泣くな、……と、笑つて勵ますお父様も泣いてゐました。

かくしていよく勝太郎少年は、富井政章博士など、一緒に、洋行することになりました。その一行八名を引卒して行く人は、フランス人でレオンジュリーといひ、早くから京都府に招聘されてゐた人でした。

レオン・ジュリーはナポレオン三世の時、長崎の領事をして居た外科醫出の人でしたが、クリミア戦争の時に従軍して重傷を負ひ、後軍醫をやめて教育界に身を捧げた人で、曾つて佛國に日本最初の大使水戸民部郷を送る時一行の澁澤子爵等を伴つて案内役としてつれて行かれた人であります。

そのレオン、ジュリーは勝太郎少年を殊の外可愛がつてゐました。

五

その頃日本の時勢は、何れも天下を論じ、國家を語る青年や學徒が巾を利かせてゐて、軍人にならなければ政治家になるといふ氣質が充ちてゐました。それで海外などに行つて職工の修行をするといふことなどは、唯氣すべきものだといつて、勝太郎少年等はひどくいみされました。

友人達は寄ると集ると、一齊に少年を罵倒し、嘲笑しました。

『君は外國に職工の見習ひに行くのださうだね、腰ぬけ奴！ 何の爲めに學問をしたんだ。職工だなんて男子のすることぢやない。それを君はやつてはづかしいとは思はぬのか。毛唐けさうの手下になつて職工の見習ひか。ハハッ………。楠公父子なんこうふしはさぞ地下で泣いてゐるだらうよ。腰ぬけ奴、骨ぬけ奴。』

と、あるとあらゆる嘲笑を送りました。そんな時には何時も

『何をするのも 天皇陛下に忠義をつくし、皇國の爲めに働く精神にはかはりはない。僕は畏くも 天皇陛下の大御心を奉じて行くのだ。』

と學友達をなだめてゐました。

×

×

×

かうした罵倒と嘲笑を一身に浴び乍ら、勝太郎少年等は元氣よく出發しました。そして途中無事で、いよ／＼フランスに着きました。一行は定められた年限を各自思ひ／＼に研究することになつたのです。

勝太郎少年は、京都府から與へられた月々二十圓の學資をもつて、染色を研究することになりました。けれどもそれには色々の準備もいります。

少年達はフランスのマルセイユについてから、語學を學ぶ爲めに、約一ヶ年間、この小學校に入りましたその後一行は互の無事を祈りつゝ別れ／＼に目的の研究に向つて進むことになりました。勝太郎少年は染色化學の研究にこそしむ事になりましたが少年は考へました。身は 天皇陛下の厚い御恩召でフランスに來てゐるのである。それも學問がくもんをしに來てゐるのではない。工業こうぎょうの研究に來てゐるのである。きれいな装なりをして、各染色工場かくせんしよくこうざうを廻つて歩いて何なんにもならぬ。それは實地じつちにやらなければ本當の修得は出來ない。

さう考へた勝太郎少年は、工業學校で三ヶ年間學習がくしゆの後、菜葉服はふくの職工を志願して、リヨンのマルナス氏經營の絹糸の染色工場に職工見習ひとして入りました。最初は十一時間勤務で、少年に與へられた仕事は雜役ばかりで便所のふき掃除や機

械の掃除や油さし等といふ小使のするやうな仕事でした。しかし何事にも忠實な勝太郎少年は、どんな小さいつまらぬ仕事でも、きたない仕事でも、只黙々として一生懸命にしました。そして町中では金が澤山かゝりますので、リヨンの街から二里ほどはなれた、小さな村にあるカトリック教會經營の寄宿舎の一室をかり受けて生活をしましたが、朝の五時にはどうしても家を出なければ、工場の出勤時間（正六時）に間に合ひませんので、毎日午前四時半には必ず起きました。そしてアルコールランプでコーヒーを沸かし、昨夜歸りに買つて來た宵ごしの堅いパンをかちつて、菜ッ葉服に着かへるや木靴を履いて雪の中、風の中、雨の中をひた走りに工場に急ぐのです。その間には乗物の便もありますが、勝太郎少年はそんなものには見向きもしないで、父母から貰つた健脚を頼りに走るのです。そして十一時間の辛い勞働をしてから、また明日のパンを買つて宿にかへるのです。

かうして働いてゐる中に、今度は職工の下仕事をする方に廻されました。その仕事

は絹糸をシャボンでねるのと染め上つた糸を川にかついでいつて洗ふのでした。勝太郎少年が糸を洗ふ役に廻されたのは、冬の中ばでした。

主い絹糸を籠一ぱい脊中にかついで、工場の前の川に小舟を入れ、張つめた氷を割つて糸を洗ふのです。紫色にかはつて腫れ上つた兩手にホー／＼と息をかけては洗ひました。洗つても洗つても次から次と糸は運ばれます。舟の中から出ることが出来ません。寒い風は身を刺すやうに川面をすべつて吹いて來ます。二時間三時間とゐる中に前掛けは氷つてかち／＼になつてしまひます。水のしぶきは榮ッ葉服を徹して全身にしみ込んで來ます。終りには自分の體とは思へないほど全身が氷つてしまふやうに思はれました。

さうした時にはあまりの悲しさには思はず

『お母様ーッ。』

と叫ぶこともありました。そうすると、故郷にあつた時の幸福な姿が目の前に浮ぶ

のでした。

よしんばそれは、その日の食に事^{こと}欠ぐやうな食^{まづ}しい生活であつたにせよ。そこには慈愛^{じあい}の父母がゐます。なつかしい妹がゐます。食^たべるものは不味^{まず}くても、着物はボロボロであつても親子四人が仲睦ましく過すことの出来たその當時を思ひ浮かべたのです。それだのにまだ可弱い少年の身をもつて、數千里も隔てたフランスの國で、只一人、西も東も知つた人はなく數千人ものフランス人の荒クレ職工の中にたつた一人で働かなければならないのです。父と呼び、母と呼び、妹と呼び、兄と呼ぶるゝ者は何所にいつてもないのです。悲しいことがあつても、それを慰めてくれる友人はどこをさがしても居ません。悲しい時は一人で泣くのです。苦しことも小さい身體に一人で苦しむのです。辛かつたでせう、悲しかつたでせう。京都に居た時は貧しさから足袋ももゝ引きもなかつたのですが、可愛がつてくれる父母が居ました。いたはつてくれる妹が居ました。慰めはげましてくる學友が居ました。それだのに、それだのに、

今の勝太郎少年にはそんな温かい人は一人もありません。泣いたでせう。

『こんなことなら、フランスまでも出てくるのではなかつた。』

と獨りごつたこともありましたが。然しさうした時にはすぐ、自分で自分の弱さを叱りつけました。

『何といふ意氣地なしだ。これしきのことで泣くやうで何うして偉い人になれるものか、男ぢやないか、男ならなくな。』

と、自分自身に云ひ聞かせてゐました。

『今の自分の努力は日本帝國の爲めだ。日本を佛國以上の工業國にせねばならぬ爲めだ。一日の努力は百日の幸福への道程である。』と思ひました。

『お父様もお母様も、今の私の働きを見てゐてくださるに違ひない。さうして喜んでゐてくださるに違ひない。みんな自分の爲めだ引いては、父母の爲め、家の爲め大きくは皇國の爲めであり天皇陛下の御爲めなのだ忍び得ざる事を忍ぶのが眞の男子だ』

六

寒い冬の間をつめたい氷の中で過した少年は、その次の年の夏は熱い絹糸のねり、場に廻されました。かまから上つた煮えたぎつた糸を四階迄かういで行つてかはかす仕事です。エレベーターなどはない、長い階段を朝から晩まで少しの休養もあたへられず働かねばなりません。煮えたぎつた糸からシャボン汁のしづくがたえず體にぼとり／＼と雨だれのやうに落ちて來ます。全身みな汗の中に顔をふくことも出來ません。大人と同じ分量をかついで終日働かねばなりませんでした。それは川の中で過した冬の間の苦しみにまさるとも決して劣りませんでした。

かうした苦しい時などは、すぐまた故郷のことを思ひ出しましたそして終日の仕事がおはつた時など、あまりの苦しさは一ぱいのコーヒールと一片のミートが慾しくなるやうなことがあります。さうした時にはすぐお母様のことを思ひ出しました。少年が家を出る時、門口に立つてドンゴロス（粗麻織）前掛けで顔を覆うてさめ／＼と泣かれ

たお母様のお姿です。

『あゝ、怠けちやいけぬ。油斷してはいけぬ。家ではお母様達が僕がこゝで苦しんでゐると同じやうにお働きになつてゐるのだ。』

さう思ふと一片のバンもミートも欲しくありませんでした。

かうして一日として、片時として父母の身を思ひ、妹のことを案じ忘れたことなく働いてゐる中に、やがて一年の星霜は少年の上に流れました。

その中に少しづつ職工の仕事もさせてくれるやうになりました。

少年はやつと一人前の職工になれるのかとどんなに喜んでか知れません。しかし何所に行つても、大人同様の辛い仕事の上に少年には仕事以外に悲しい日が来る日も来る日もつきましました。

それはフランス人があたへる侮辱でした。數千人もの職工の中にたつた一人の日本人である勝太郎少年は、常に侮辱や嘲笑のままとされてゐました。

それはある日の晝休みの時でした。大せいの職工達は、勝太郎少年の周りを取りまいて、

『おい稲畑、飯か、ハ、ハ、ハ、お前でも飯をくふのか、どれぐ一體どんなものを食つてゐるのか見てやらう、出して見い。おい。』
といつててんでに風呂敷包をあけるのでした。その中の一人がいひました。

『おやバンだよ、お前はバンを食つてゐるのか。』

『エ、バンを食べてゐます。』

『これは驚いた。いや恐れ入つたね。バンを食ふとは支那人にしちや珍らしい。』

といふのです。その頃、日本といふ國の存在は少しもみとめられては居らず、東洋の小さい國で支那の屬國位と思はれてゐなかつたのです。

『支那人ッ』

勝太郎少年はムツとして立上りました。

『ハ、ハ、怒つたのかい。馬鹿野郎、貴様が憤つたつて誰がこはがるものか、支那人に違ひあるまい。支那人は鼠を喰ふといふぢやないか、俺も今日までお前はねずみばかり喰ふてゐると思つてゐたよ。それが珍らしやパンを食ふとは、おい、今日はお前の誕生日かい。』

とさんさんに罵倒されました。しかし勝太郎少年は只黙つたまゝ食事をすませるや、さつさと仕事にかゝるのでした。

その夜少年が歸る道すがら、フト空を仰ぐと、マン丸い十五夜の月は皎々と照りはえてゐました。

『あゝお月様だ。日本でも見ることの出来るお月様だ。お父様やお母様も今日は椽側で、この十五夜のお月様をながめていらつしやるだらう。あゝお月様、あなたの知つてゐられるやうに、僕は小さい小僧です。染色工場の見すばらしい職工です。そして毎日一生懸命に働いて、一生懸命に勉強してゐます。しかしそれと同じやうに毎日み

んなになぶられてゐます。なぶられることはそりや嬉しくないさ。けれどもね僕は平氣ですよ、何事も忍耐です。今に見てゐて下さい私の將來を。きたない小僧と笑はないで下さいね。ナアに私は決して泣いてなんか居やしません。』

さういつて勝太郎少年は、そつと涙をふき乍らニツコリと微笑みました。それから數日経つてからのことでした。

また晝食の時に三十人ばかりの職工は、少年を取りまきました。そしてさん／＼なぶつた末、午後六時頃工場の薄暗い所につれて行きました。

そこには職工中での腕ぶしの強いといはれる二十歳前後兩腕に入づみをしたフリゼー（チゲレ毛といふ意味）不良青年が待つてゐて、勝太郎少年が入つてくると、いきなり烏打帽子を取つて、

『ハ、ハ、お前には鼻がないね、頬ツペたとすれ／＼ぢやないか。支那人は赤ン坊の時に仰向けにねせないで、腑向けにねかしておくのだね。それで鼻がペシヤンコに

なるんだ。縦から見ても横から見ても鼻の所在が分らぬ。おいこつちに向いて見ろ、あつちに向いて見ろ』

とさん／＼なぶつた末、

『お前は先日パンを食つたさうだね、フランスはねずみが高いから食へないのかい。支那人のくせにパンを食ふとはぜいたくだよ。明日から常食のねずみを食へよ。』と更に先日さきのやうに罵倒ばとうしました。

七

勝太郎少年は一度ならず二度までも、支那人として罵倒され、ねずみを喰ふとゝしられて、もう絶えられぬ侮辱おほを覺へ、兩の拳こぶしを握りしめていひました。

『支那人しなじんとは誰だれのことだ。俺おれは日本人だぞ、日本男子だぞッ』と叫さけびました。

『ハ、ハ、何をいふんだ、日本人も支那人も同じことだ。日本は支那の屬國ぢやな

るか。』

『何にッ、屬國だッ』

今はもう堪忍袋の緒が切れた勝太郎少年、今までは何といはれても笑ひで答へて、
我まんに我まんをして來たのだが、もう堪忍出來ませんでした。双頬はさつと紅を染
め眼光はするどくその青年をにらめつけました。そしてツカ／＼とその青年の前に進
みました。相手の職工達も碧い目をむいて、拳を握りました。雨か風か、異様な重苦
しい沈黙が室の中にみなぎりしました。拳を握つて、その入すみの青年の前に立つた勝
太郎少年は、全身これ愛國赤誠の化身の如きものでした。

『おいもう一度いつて見ろ、日本は支那の屬國ともう一度云つて見ろ。』

一語一語、赤誠の言葉は魂をついてあふれ出しました。

『日本帝國はな、畏くも萬世一系の天皇を戴いてゐる世界無比の神國なのだ。愛國赤
誠の日本人の拳を喰つて見ろ。』

といふや否やいきなり飛び上つてその青年をボカ／＼となぐりつけ、ひるむ所を引つかついでドシンと投げつけました。そして

『おい、皆も掛つてこい。日本男子の腕つぶしを喰つて見ろ。』

と叫びましたが、少年の勇ましい態度に恐れ戦いて、何人も掛つては来ませんでした。戦ひはそれで終りましたが、こゝに大變なことには、勝太郎少年に投げつけられた青年は、耳を打たれ足をくちいたといふので、その晩から大變な熱を出してとうとう入院してしまひました。

このうわさを聞いた勝太郎少年は、工場が退けるとすぐその足で病院を訪れました。フリーゼー青年はまたなぐりに來たのかと驚いてベツトの上に起き上りました。

「靜かに」

「少年は軽く會釋して、

「けふはお見舞に參りました。いやあわびに來たんです。私の短氣の爲めに働き手の

あなたが、病床に横はるなんてさぞ御家族はお困りでせう。どうぞ許して下さい。」

「……………」

「私が短氣だつたのです。私は自分の本分を忘れてゐました。義務を怠つてゐました。私はフランスに工藝を研究に來たのです。それも自費ではない京都府から留學を命ぜられて來たのです。人一倍自重しなければならぬ身體です。それを忘れて一時の感情に走つてあんな亂棒を働いてしまひました。私の不徳、只おわびするより外ありません。」

「稻畑君ッ」

「僕は、マルナスの工場に、染色法を研究に入つたのです。いはゞあなたは私の師匠です。どうかお許し下さい。」

「稻畑君待つてくれ、もういいはないでくれ、君にさういはれると、僕はどうしたらいいのだ。何と返事をしたらいゝのだ。こんなことになつたのもつまりは僕が悪かつた

んだ。俺達が悪かつたんだ。眞面目に働いてゐる君に、遺恨もないのに喧嘩をふつかけたのは僕達だ。稲畑君、君が怒るのは當然だよ。祖國を罵られて怒らぬ者はない。異郷にあつて、淋しい生活をしてゐる外國人を慰めやうともせず、その祖國をのしつた僕が悪かつたのだ。稲畑君、謝罪などする必要はない。友人の中で誰一人見舞に來てくれないのに、君が來てくれたことはどんなに嬉しいか分らない。」

といつて夜具に顔を埋めて泣きました。

過ちを改むるに憚かること勿れ――。

みな様も學校で習つたでせう。眞に千古不朽のこの名言は尊いものです。勝太郎少年も自分の過ちを知つて、喧嘩の相手の許を訪ねて深く悔ひました。フリゼー青年も亦勝太郎少年の至誠に動かされて、潜然と涙にくれて悔いたのです。

そして今まで、二人の間に流れてゐた冷たい氷のやうな、そしてとげのやうに鋭い感情は一時にとけて互に心から暖かく結ばれたのです。

やがて勝太郎少年はそこを去りましたが、それから隔日に必ず見舞をした上、月々の給料は全部袋のまゝフリゼー青年に送つてその全快を祈りつゞけました。

この事が忽ち工場主や技師長はもとより、全工場の職工の耳にも入り、今までの冷酷使は消えて、工場内はこぞつて勝太郎少年に温かい心を寄せるやうになりました。技術もこちらから頼まないのに進んで教へてくれるやうになりました。全工場の人氣男になつてしまはつたのです。

そして少年は間もなく職工に昇進しました。職工になつてから益々辛苦精勵して數年の中に染色術の温奥を極め、マルナス工場を辭しましたがその後スイツルや伊太利迄も行つて種々研究しました。

八

恰度その頃でした。明治十六年にオランダのアムステルダムに、萬國博覽會が催され、わが日本からも澤山な出品をしました。が、外國の事情が明るいといふので、勝太

郎少年は年廿歳にして助手として出品の種々な仕事をしました。

其時六百圓ばかりの高價の銅製花瓶一對を獨逸の貴族が買ひましたが、その運送方を依頼した同地運送問屋支配人（ジュデア人）は會期が迫つても少しも金をもつて來ませないので、少年がかけ合に行くと、大變すまないことだが、獨逸人から貰つた代金を途中で落してしまつた。家には妻子も父母もあるので、この大金を賠償するとなると一家は路頭に迷はなければならぬ。どうか後生だから許してくれといふのです。勝太郎少年は大いに同情して、その前後策を日本公使館の顧問シーボルトといふ人に話すと「それは日本人を馬鹿にして金を着服すると云ふ芝居に過ぎない。」

といふのでした。勝太郎少年は今迄の同情が却つて憤怒とかはり、

「金はせひ支拂つてくれ、そのかはり御禮として君の努力に相當する品を贈るから」と談判しますと、その支配人は喜んで金を持つて來ました。もと／＼シーボルト氏の云ふごとくごまかしてゐたのですから、何の造作もなくすぐ翌日に届けたのです。で

お禮として勝太郎少年は一錢位する張り子の虎を贈りました所、非常に怒つて喰つてかゝりましたが、勝太郎少年は

「これが君の努力に相當なものだ。日本人は君達にごまかされ、馬鹿にされるような者は一人も居ないのだよ。」

といつてやりました。そこでも日本人の偉い所を歐洲人に見せてやつたのです。先生は常に何事も争ふことを避けたが、日本人の名譽に關する如きことは決してゆづりませんでしたかうしたズビントも残して八年目に、廿二歳の若き身乍ら、押しも押されもせぬ染色化學の泰斗となつてなつかし日本にかへつて來ました。

歸朝後は京都府の御用掛を拜命して、暫らく勤務いたしておりましたが、明治廿三年京都織物株式會社を設立し、この技師長となり、こゝに滯歐八年間の蒞蓄を傾けて會社の爲めに従事することになりました。

が、何がさて日本最初の機械使用の絹織物染色會社である上に、澁澤榮一子爵や益田孝氏^{たかし}、大倉喜八郎氏など、いふ方々が發起人^{はつきじん}として起られたのですから、一片^{ぺん}の出資申込書が二十圓三十圓と飛ぶやうに賣買され、一口五十圓の株券が百圓二百圓と賣買されるといふ盛んなものでした。

その大會社の技師長になつた勝太郎少年は、身を粉にして會社の爲めに働き絹物のリヨン黒染、絹糸の増量法、縞羽二重の染色等を創始し、何れも立派な成績をあげてをりましたが、一方會社全體の成績は創立時の人氣と反比例して餘り香ばしくありませんでした。

九

と、會社創立後丁度三年目のことです。即ち明治廿六年の秋、少年も今は青年となり、元徳島藩^{さくしまはん}の漢學者森重遠氏^{もりしげさへ}の令嬢で、元老院議員伊澤修二氏夫人の令妹^{れいまい}にして、幸田延子さん達と同窓で上野の音樂學校を出られた登美子さんと結婚して僅かに一ヶ

月目のことでした。朝會社に出かけやうと仕度をしてゐると、突然會社から一通のハカキが配達されました。それには意外にも

本日限り解雇候也

といふ免職の通知でした。

粒々三年、汗を流して働いた技師長を免職するのに一本のハガキとは……流石の勝太郎氏も驚きました。しかも結婚後僅かに一ヶ月、今は獨身自由の體ではないのです。

「登美子、これを見ろ、私は遂に會社を免職になつた。」

「エッ、免職に？」

「さうだ、粒々三年會社と生命を共にして來た私も、營業不振の責任者としてだ。こうなれば私はかまはないが、お前が氣の毒だ。一文の貯金もない身で、明日からどこに

勤めるといふあてさへない體の主を持つて、今後どんな苦勞が身にふりかゝるかも知れない。」

「何をおつしやいます。夫婦は楽しい時ばかりのものではありません。苦しみを共にするのが當然です。僅か一ヶ月とおつしやいましたが、翌日からの苦勞も覺悟の前で參りました。働かせう。明日から技師長の妻でなく、マエカケ姿で私も働かせう。」

と健氣な決心をして主人を勵ました。そして結婚の費用として會社から借りた五十圓の金は夫人が着て來た嫁入の晴着を賣つて仕拂ひ、こゝに夫妻は無一文裸一貫のまゝ社會へ放り出されてしまひました。

十

さていよいよ會社と絶縁した勝太郎氏は、人に頼らず獨立事業を企てることになり裸一貫を資金に、京都西陣の自宅の小さい土間に、染鍋一つを備へつけ糸染屋を開

業いたしました。

昨日まで大會社の技師長として時めいてゐた人が、今日は夫人と共に稼ぎで、昨日にかはる今日の商人姿で、厚司あつしを着て紺こんの股引ももひきを履はいての顧客廻りさくみまは、登美子夫人はマエカケ姿の襷たすきがけて、甲斐々々しく店の手傳ひをして寸暇もなく働きます。

かうして昔を忘れた夫妻は身を粉碎して働きました。明けても暮れても只奮闘――只努力――寸時の油斷もなく立働らきました。

夫妻協力しての奮闘と努力は、必ずや報ひられる日がなくてはなりません。やがて染屋も小僧一人り追廻して幾分飯も食へる様になつて來ました。そこで佛國サンドニ――染料製造會社と契約して染料の委託販賣を始め、これも染料を背負つて賣り歩きしました。かうした努力を續けること廿年一日の如き奮闘は………。夫妻の何物をも焼きつくさなければ止まぬ努力は………。遂に何ものをも焼きつくして、遂に今日の如く大稻畑おほいなはたの主あるじとなり、日本實業界の霸王はわうとして、大坂商業會議所會頭として關西くわんさいの財

界を一手に掌握するに至り、その名聲こそ日本が世界に誇る大偉人として、四海に輝やくに至つたのです。

それにしてもこの大偉人の蔭に賢婦登美子夫人のあることを決して忘れてはなりません。

逸 話

稻畑先生は我が國染色界の泰斗でありますので、宮城御造營の時は御用掛として、玉座の色どりの考案は全部先生の奉公になつてをります。

かくの如く日本の染色界になくはならぬ有名な偉人ですが、また一方には日本最初の活動寫眞輸入紹介者です。日清戦争の後でした。再度佛國に留學した時に、リヨンのリミエールといふ人から映畫の代理權を得、日本に持ちかへつて大坂の中村福助中村雁次郎等を主役にして、あらゆる苦心と研究をもつて遂に日本獨特の映畫を完成し今日の如く隆盛になつた映畫界も一に稻畑先生の功勞であります。

それから日露戦争の前のことでしたが、英國がトランスバルの戦争で、カーキ色の軍服を用ひて非常に成績がよかつたので、日本軍隊もそれを真似ようと思ひましたが、どうしても思ふやうに色が出ず、やつと出たかと思ふと風雨に二三度も打れるとすぐはげてしまうといふ貧弱なものでした。それを稻畑先生が苦心研究の結果、今日の如くいくら風雨にさらされても少しもはげない堅固な色が出来上りました。これ一重に稻畑先生の御努力の賜であります。また只今全盛のモスリン紡績工業も先生の御研究によつて初めて出来上つたのです。更に大きなことは、世界戦争の時獨逸からの染料が来なくなつて大變に困つた時、政府は補助金を出して日本染料會社を設立しましたが思ふやうに行かず、會社を解散することになりました。その時皇國を思ふ稻畑先生はその不境な會社に自ら入り遂に現在の如き大會社にし、その上今日では獨逸に決して負けぬ國產染料を作るやうになりました。

果かくの如く一に染色化學のみでなく、あらゆる方面に向つて日本に貢獻された先生

は、只今七十歳の高龄に達せられましたが、尙まだ壯者を凌ぐ御元氣で少年時代の魂をそのまゝに、皇國の爲め 天皇陛下の爲め 一身を捧げてゐられます。

そして只今は貴族院議員正六位勳三等として政界にも重きをなしてをられ、更にルーマニアの總領事を初め、ベルギー、ポーランド、ボルビヤ、ポルトガルの各國の領事を兼任されてゐます。日本人にして外國の領事になられたのは稻畑先生が嚆矢で如何に諸外國に對しても、大きな信望があるかが分ります。

只今稻畑先生が持たれてゐる勳章だけでも、

勳 一 等

ルーマニア大寶章、佛國カンボチヤ大寶章

勳 二 等

ポーランド、チエツクスローバキヤ、ボルビヤ、ベルギー、ロー

勳 三 等

マ、安南、日本、支那、ベルギー、チニス、佛國レジオンドール

勳 四 等

世界各國

其他褒章、綠綬褒章、紺綬褒章、佛國文數大學章

等ととうてい胸間にはつけることの出来ないほど澤山持たれてゐます。これを見ても先生が如何に世界各國の融和をはかり貢献されてゐるかが分ります。

先生の邸は只今京都市にあります、そこにはシヤムの兩陛下、英國の第三皇子ジョッフェル將軍、印度支那の前總督ルーム一行、メルラン一行、ルーマニアのカロール殿下(現皇帝)その他各國大公使で一度日本に足を入れる方々は一人残らず稲畑先生を訪ねられてゐます。稲畑氏も國民外交を自ら任じ國際親善に努力されているのです。何といふ力強いことでせう。かゝる大偉人を日本が持つことは世界に向つて鼻が高い思ひをします。これといふのも先生の屈しても止まぬ努力と、涙ぐましい忠君愛國の賜であります。どうか皆様はこの尊い努力奮闘史を繙かれて勵んで下さい。稲畑先生に出來得たことが皆様に出來ない筈はありません。稲畑先生も人でありみな様もまた人であるのです。

三(をしまひ)...

昭和六年二月廿五日 印刷
昭和六年二月廿八日 發行

定價金拾錢

著者 兼發行者 君塚勝彦

印刷所

醫學小學校
附設授產場
靈岸印刷所
東京市深川區靈岸町一五七番地

東京市外千駄ヶ谷町穗田一

發行所 ことも教育讀物出版協會

振替東京七六二〇九電話青山〇一八四

大賣場

東京 北 隆 海

東京 田 隆 海

館 堂 屋 館 堂

大 弘 柳 川 菊

阪 明 原 瀬 竹

屋 號 堂 店 店 文

金 谷 目 煥 富

港 島 黑 呼 貴

堂 屋 店 堂 堂

々方の助賛行刊書本

衆議院議員 衆議院議員 前文部次官 元九人總長 貴族院議員 工學博士 日本女子大學校長 東洋大學教授 日本少年禁酒聯盟長 教育博物館長 三共製藥社長 貴族院議員 東京府立第一高等女學校長 貴族院議員 東京女子高等師範教授 松竹社長

降旗元太郎 山崎達之 栗田文全 眞田正藏 小島生川 麻生正藏 高島米藏 守屋米藏 伊藤右衛門 秋保安 鹽原又蘇 德富蘇 市川源太 服部金太 倉谷橋竹次郎

貴族院議員 東京市教育局長 男爵 東洋家政女學校校長 樞密顧問官 國際通運社長 貝島商業社長 貝島乾鑑社長 山脇高女校長 小倉石油社長 元文部大臣 子爵

大川平三郎 木村久壽彌 藤井利一 安川敬福 岸邊福一 金子堅太 中野金次 中野金次 貝島太 貝島太 山中島 山中島 小島 岡田良 澁澤榮一